

# 「コントロール理論」

新 井 洋 一

0. この論文では PRO の Controller の決定に関与する「コントロール理論」(Control Theory) の問題を考える。最初に Chomsky 1981 を中心にして PRO とコントロール理論を概観し検討すべき方向を探る。次にその方向に沿って検討を行ない次の主張を行なう。第一に Thompson 1973 の提案を再検討しながらコントロール理論には述部の種類の分類が必要であり、意味的に 'privateness' の高い述部と 'publicity' が高い述部の二つに大きく分けられるべきであること。そして PRO が唯一的に決定される前者の場合は Jackendoff 1972 の Thematic Relation を基本にして PRO 解釈が行なわれるべきであること。第二に任意の NP をコントローラーにとる後者の場合その制約として Koster 1978 の Locality Principle が必要であることを主張する。第三に Locality Principle に一つの補助規則を提案することによって Jacobson & Neubauer 1976, Hasegawa 1983 等の主張する Rule cyclicity の概念は不必要になることを論じる。

## 1. コントロール理論概観

### 1.1. PRO の特徴

Chomsky 1981 は PRO の特徴を次のようにまとめている。(a) PRO は統率 (govern) されない。(b) PRO の先行詞は独立の  $\theta$ -role を持ち、PRO もまた独立の  $\theta$ -role を持つ。(c) 先行詞と PRO の関係は Subjacency Condition を満足する必要はない。(d) PRO は先行詞を持つ必要はない。(c) の Subjacency を破っても良いという特徴は次の例から明らかである。

(1) (a) John thinks [that it will be difficult [PRO to feed himself]].

(b) John thinks [that<sub>S</sub> [<sub>S</sub> PRO to feed himself]<sub>S</sub>] will be difficult].

(c) [Any attempt [PRO to feed himself]] will be difficult for John.

対照的に痕跡は Subjacency に従う。

(2) (a) \* John seems that it will be difficult *t* to feed himself.

(b) \* John seems that [<sub>S</sub> *t* to feed himself]<sub>S</sub> will be difficult.

PRO の現われることのできる位置は、(a)の「PRO は統率されない」という原則から次の位置だと考えられている。

(3) (a) the position of subject of an infinitive

(b) the position of specifier (subject) of an NP

(c) the position of COMP (Chomsky 1981:64)

(4) (a) it is unclear what PRO to do *t*.

(b) I'd much prefer [<sub>NP</sub> PRO going to a movie].

(c) I bought a book [[<sub>COMP</sub> PRO][<sub>S</sub> PRO to give *t* to Mary]].

本論は Complement Subject の PRO の問題について考えるものなので(4)

(c)のような COMP 内の PRO の問題は除外し、(4)(a)(b)のような PRO に限定して考察することにする。(3)(a)の位置は Case が与えられない位置であり PRO の生起は義務的である(5)。一方(3)(b)の位置は Genitive Case が付加でき NP も PRO も生起できる。PRO の生起は随意的である(6)。

(5) (a) I persuaded Bill PRO/\*Tom to leave. (V NP PRO to VP)

(b) I was sorry PRO/\*Bill to leave. (V AP PRO to VP)

(c) I appealed to Bill PRO/\*Tom to leave. (V PP PRO to VP)

(d) I asked (Bill) what PRO/\*Tom to do. (V...Wh-phrase PRO to VP)

(6) I'd much prefer [<sub>NP</sub> his going to the movie].

Chomsky の PRO 解釈に関する基本的主張は、「PRO は痕跡と違って局地的に Control される必要はない」というものである。例えば they thought

NP said [that [PRO to feed / feeding each other (themselves)] would be difficult という例文をあげながら、「Control の現象は Control verbs の特性によって直接説明されるのはまちがいである。なぜなら Control verbs が全く無い時にもこの現象が起こるから (p. 73)」と述べている。しかし一方で彼は次の例文の容認性の相違は Control 動詞の特性によって直接説明されるとはっきり述べている。

(7) (a) \* They told *me* what PRO to feed each other.

(b) *They* asked me what PRO to feed each other. (p. 72)

つまり彼は Control Theory は動詞の特性によって説明される場合と、それらとは無関係に説明される場合とがあることを主張している。しかし Chomsky 自身どれが Control 動詞に属するものであるかとか、どの場合に Control 動詞の特性によって決定されるかとかいう問題に関しては明示的に説明していないように思われる。何を Control 動詞と呼ぶのか、その基準は何であるのか決定的な説明はなされていないように思われる。第二節でこの問題を課題として検討してみることにする。

## 1.2. Chomsky の主張

Chomsky 1980 は Controller 決定規則として基本的には Rosenbaum 1967 の Minimal Distance Principle に類似した規則を提案した。しかし Chomsky 1981 ではこの OB 理論で提案したものを彼自身大ざっぱなものとしてしか評価しなくなっている。この背景にはコントロール解釈の複雑さという現実が存在しているように思われる。

例えば Chomsky があげている ask という動詞の例を観察してみても (8) に示されるように複雑であることがわかる。イタリック体の名詞がコントローラーであるが、(8)(a)のように疑問不定詞の主語として現われた PRO は総称 one (generic *one*) の解釈も可能であるし、(8)(c)では John よりも容認性は低いが the teacher もコントローラーになれるという。(8)(e)の ARBITRARY というのは、どの任意の NP もコントローラーになる可能性があるということであ

る。

- (8) (a) *John* asked Bill how PRO to feed himself / oneself.  
 (b) *John* asked *the teacher* PRO to leave early.  
 (c) *John* asked (begged, pleaded with, ...) the teacher PRO to be allowed to leave early.  
 (d) *John* asked Bill PRO to get (receive) permission to leave early.  
 (e) John was asked t what PRO to do. (ARBITRARY)

(8)と対照的に promise の場合にコントロール解釈が不可能な場合がある。

- (9) (a) *John* promised Bill PRO to feed himself/\*oneself.  
 (b) *John* was promised PRO to be allowed to leave.  
 (c) \* *John* was promised PRO to get (receive) permission to leave early.  
 (d) \* *John* was promised PRO to win.

その他各動詞ごとに次のような相違が見られる。

- (10) John persuaded / appealed to / pleaded with *Bill* PRO to feed himself/\*oneself.  
 (11) (a) John told *Bill* PRO to feed himself/\*oneself.  
 (b) John told *Bill* how PRO to feed himself / oneself.  
 (12) (a) *John* got PRO to meet President Ford.  
 (b) John got *Bill* PRO to meet President Ford.  
 (c) *I* got a book from Bill PRO to give to Mary.  
 (13) (a) It is important (difficult, etc.) PRO to get an A in math. (ARB.)  
 (b) PRO to clear myself of the charges is important to *me*.  
 (c) PRO finishing my work on time is important to *me*.  
 (d) It is unclear how PRO to feed oneself. (ARBITRARY)

(8)(a), (11)(b), (13)(d)から明らかなのは、疑問不定詞句の PRO は総称 one の解釈が可能であるということである。この事実は付帯的事項として文法理論に

組み込まれるべきものであろう。コントロール理論を構築するための手がかりを与えてくれるものはむしろ、(8)(a)では主節の目的語がコントローラーにならないが(11)(b)では主語がなれないという事実である。これはコントローラーの決定が各動詞の内在的特性に依存していることを示すものだと言える。ask も tell も  $\bar{v}$  [V NP  $\bar{S}$ ] という構造を取る点では同じであり、それぞれの動詞の性質によって  $\bar{S}$  内の PRO のコントローラーが与えられるものと思われる。Chomsky 1981 は結論として「コントロール理論には (1) structural configurations (2) intrinsic properties of verbs (3) other semantic and pragmatic considerations などの様々な要因が含まれていて、これらの要因を分類したり様々な言語的相違点や類似点を説明することが残された問題である (pp. 78—79)」と結んでいるに過ぎない。これらの問題を具体的に掘り下げて議論して行くためには、様々な言語事実を部分的に分類して検討し、何がコントロール理論に不可欠なものなのかを探し出すことが重要である。次節からはこの方向に沿って動詞の特性とコントロール理論の関わり合いを中心にして議論を進める。

## 2. 述部の分類

### 2.1. Thompson 1973 の提案

Thompson 1973 は動詞の意味論的特性として 'privateness' という概念を導入してコントロールの問題を解決しようとする。彼女の考え方を今の Control 理論に合うように形を変えて考え直してみよう。PRO の解釈が主節の ANIMATE NP によって義務的に決定されるかそれとも随意的に決定されるかは、補文を直接支配する動詞の 'privateness' という意味的特性に依存しているといえる。彼女は dread (Evelyn dreads singing a solo), bear (Max can't bear watching the tide come in), avoid (Sue avoids serving white wine with fish), prefer (Sir Hubert prefers hunting elephants) などの動詞は、「個人とその個人の私的な思考や感情や個人的な幸福に関与し」「個人

以外これらの動詞によって表わされる命題内容が真であることを知る必要はない」という共通の特徴を持っていると考えこれらを 'private predicates' と呼ぶ。これらと対照的に 'public predicates' と彼女が呼ぶものがある。それらの共通の特徴は「一般的に共有されている行為の描写」「伝達とか客観的に認知可能な命題内容の描写」を行なう述部である点である。これらの述部として 'communication predicates' や 'causative predicates' があげられる。次は前者の例である。

- (14) I argued against seeing a lawyer.  
 (15) Father talked about getting a wig.  
 (16) Fred disapproves of opening up trade with Albania.

これらの文の PRO は主語の NP あるいは他の任意の NP がコントローラーとなることができる。

次は後者の例である。

- (17) Trapping muscrats bothers Mary.  
 (a) ...she thinks it's not feminine. (Mary)  
 (b) ...she is circulating a petition to make it illegal. (one, people, they)  
 (18) Not getting home until 3 a.m. worried Mother.  
 (a) Mother knew we were expecting her home by midnight.  
 (Mother)  
 (b) Mother was sure you'd had an accident. (you)  
 (19) Playing the drums might disturb the neighbors.  
 (a) they might get overexcited while doing so. (they)  
 (b) so I'll play my saxophone instead. (I)  
 (20) Putting up new curtains in the kitchen was Harry's idea.  
 (a) you'll see he get them crooked. (he)  
 (b) he's always thinking of projects for me. (I)

それぞれの文に(a)又は(b)のような文が続くと PRO が様々に解釈される事実からこれらのコントローラーは任意に決定されると考えられる訳である。

以上から Thompson は(21)に属するものを 'private predicates', (22)に属するものを 'public predicates' と呼んで区別している。

(21) Private Predicates

(a) fun, easy, nice, wise, bad, dangerous, healthful (*Tough* movement predicates) (GOAL)

(b) try, propose, advocate, (feel) like, be fond of, forget, take pride in, remember, endure, bear, stand, dread, enjoy, fear, prefer, stop, weary of (AGENT)

(22) Public Predicates

(a) bother, disturb, worry, surprise, upset, make... mad / angry (causative predicates)

(b) talk (about), discuss, tell, consider, object to, argue against, (dis)approve of, ask (about), be X's idea<sup>1)</sup> (communication predicates)

(c) suggest, recommend, allow, permit, forgive (GOAL)

(23)を考えてみよう。

(23) (a) Hal considered becoming a karate instructor.

(b) Next we considered trapping muscrats (and its effect on ecology of the area).

consider という動詞は 'privateness' の意味が強い時 PRO のコントローラーは義務的に Hal と解釈されるけれど(a), 'discuss' のような意味の時公的な意味合いが強まるので, PRO のコントローラーは主節の主語 we と必ずしも一致しなくてもよくなる(b)。この動詞は private verb としても public verb としても機能するのである。このことは述部の 'privateness' という意味的特性がコントロール解釈に深く関与していることを示している。Chomsky の今ま

でなされた提案ではこの区別はできない。

## 2.2. 分類の問題点と修正案

Thompson の分類では *suggest*, *recommend* などを 'public predicates' の一つと考えているがこれは正しくない。このグループの述部は任意の NP をコントローラーにとることができるはずであるがこれらの動詞は主節の主語の NP をコントローラーとしてとることは不可能だからである。

- (24) (a) The psychiatrist recommended getting away for a week.  
 (b) The psychiatrist recommended me to get away for a week.  
 (25) (a) Kathy suggested going to the beach.  
 (b) Kathy suggested (to me) that I/\*Kathy should go to the beach.

(24)において *get away* の意味上の主語は主節の主語 *the psychiatrist* ではない。(25)においても主節の主語 *Kathy* が *go to the beach* の意味上の主語にはなれない。*permit*, *allow*, *forbid*, *inhibit* なども 'public predicates' のグループに入れているが、これらも任意の NP をコントローラーにとるとは考え難い。その許可や禁止を受けた NP だけがコントローラーになれるのである。こうして Thompson の幾つかの動詞の分類は不備であり事実を誤まって予測してしまうので何かしらの制限が必要である。この論文ではこれらの例外的な述部のコントローラーの決定は Jackendoff 1972 の提案する主題関係 (Thematic Relation) によって制限を受けるものとする。

例えば今述べた動詞は全て GOAL となる NP が補文のコントローラーであることが指定されるので任意の NP の解釈は排除できる。

- (26) (a) I will allow *them* to do as they like.  
 (b) Mary permitted *Alex* to go.  
 (c) I forbid *you* to enter my house.  
 (d) An accident prohibited *him* from coming.

この他の述部についても文法関係に関係なく正しいコントローラーの指定が容易に可能になる。



- (27) (a) John persuaded *Bill* to go home.  
 (b) *Bill* was persuaded by John to go home. (GOAL)
- (28) (a) *John* got to meet President Ford.  
 (b) John got *Bill* to meet President Ford. (THEME)
- (29) (a) Mary permitted *Alex* to go.  
 (b) Mary gave *Alex* permission to go.  
 (c) *Mary* received permission to go from Alex. (GOAL)
- (30) (a) John forced *Bill* to wash the dishes.  
 (b) *Bill* was forced by John to wash the dishes.  
 (c) George forced *Bob* to sell his car.  
 (d) George forced *Bob* into selling his car. (THEME)
- (31) (a) *John* promised to go.  
 (b) *John* promised Bill to go.  
 (c) *Mary* gave Alex a promise to go.  
 (d) Mary received from *Alex* a promise to go. (SOURCE)
- (以上 Jackendoff 1972)
- (32) The mayor devoted his morning hours to reading sports. (SOURCE)  
 (Kajita 1976)
- (33) They confined the right to teach to *those who had been licensed*.  
 (GOAL) (Scheurweghs 1959:215)

ここまで私たちは述部を直接蔽密下位範疇化している補文の PRO の解釈の決定について考えて来た。そしてその決定に際して Thompson 1973 と Jackendoff 1972 の主張を応用してみた。その方法は主として意味論的アプローチと言えるものである。つまり補文の PRO を支配する述部の中心となる語い項目の意味的特性によってそのコントローラーを決定しようとするものである。もしその中心の語い項目の意味的特性の 'privateness' が強い場合, try, propose などのようなものは AGENT をコントローラーにとり, fun, health-

ful などのようなものは GOAL を唯一的にコントローラーにとる。もし、'privateness' が弱く、'publicity' が強い場合 causative predicates, communication predicates のほとんどは任意の NP をコントローラーにとることが可能であるが、許可、禁止、勧誘、命令など、人に行為の制限などを行なう述部 permit, allow, forbid, prohibit, recommend, suggest, order などは GOAL のみがコントローラーになる。

このアプローチがいままでの提案より特に勝っていると思われる点は、causative predicates や communication predicates などのほとんどの述部が任意の NP をコントローラーにとれることを 'privateness' と 'publicity' という意味的概念を導入することで自然に説明し、他の唯一のコントローラーしかとれない述部との区別を可能にしている点である。Solan 1978 の Complement Subject Interpretation や、Rosenbaum 1967, Chomsky 1980 の Minimal Distance Principle のような統語論的観点からのみのアプローチは、任意の NP をコントローラーにとる PRO 解釈の可能性をほとんど排除してしまっている点で良くない。私たちのアプローチはこの点を正しく説明できる。また Jackendoff の Thematic Relation の概念を導入することは上の例文であげたように、受身変形(27)(b)(30)(b), 名詞化(30)(31)などの影響を受けずにコントローラーの決定を自然に行なえる。また(32)(33)の例文のような統語論的規則では説明が困難で例外として扱われることになるものも、どのみち必要な主題関係という意味的概念を用いて PRO 決定を自然に行なえるのである。

以上から私たちは次のような PRO 解釈規則を提案する。

#### (34) PRO 解釈規則

PRO のコントローラーは PRO を含む補文を command している内で最も主要な述部の語い項目の内在的特性である 'privateness' あるいは 'publicity' と Thematic Relation によって決定される。

補助規則：

(a)もし主要な述部の中心の語い項目 X の 'privateness' が高く、X と補

文の PRO の順序が次の (i) の時は AGENT を, (ii) の時は GOAL をコントローラーとして選べ。

- |           |           |
|-----------|-----------|
| (i)       | (ii)      |
| X ... PRO | PRO ... X |

(b)もし語い項目 X の内在的特性の 'publicity' が高い時任意の NP をコントローラーとして選んでよい。

(c)もし語い項目 X が人に行為の制限を行なう意味要素を含んでいる次のような述部の時は GOAL をコントローラーとして選べ (permit, allow, forbid, prohibit, recommend, suggest, order)。また persuade; get, force; promise, devote; confine などの述部はそれぞれ GOAL, THEME, SOURCE, GOAL をコントローラーとして選べ。

### 3. Locality Principle と補助規則

#### 3.1. The Intervention Constraint と Locality Principle

以上考えて来た構造は従来同一名詞句削除規則 (Equi NP Deletion) によって説明しようとされてきたものである。そして前節ではコントローラーが唯一的に決定される場合と任意の NP が選ばれる場合の二種類の分類の必要性を論じた。そして前者のコントローラーは(34)の規則の(a)か(c)の補助規則の適用によって決定されることを論じた。本節では(34)(b)の規則に関係する後者のコントローラーの問題を更に深く考えることにする。前節で述べたように 'publicity' が高い causative や communication predicates に command された補文の PRO は任意の NP をコントローラーとしてとることが可能であるが必ずしもそうでない場合が存在する。

- (35) (a) Giving myself a promotion would anger the press.  
(b) \* It would anger the press to give myself a promotion.
- (36) (a) Helping yourself to seconds would shock the hostess.  
(b) \* The hostess would be shocked by helping yourself to seconds.

(Clements 1974)

⑤⑥の(a)はそれぞれ PRO が I, You であり (この時逐行分析を考えてもよい), 任意の NP がコントローラーになれることを示しているが(b)のような構造になるとそれは許されない。

⑦ (a) John said that making a fool of himself / herself in public disturbed Sue.

(b) John said that it disturbed Sue to make a fool of \*himself / herself in public. (Grinder 1970:301-302)

(37.a) では PRO が任意の NP をコントローラーにとれることを示しているが, 同じ命題内容を持つはずである(b)の PRO は Sue しかコントローラーにとれない。

これらの現象を Grinder 1970:308 は The Intervention Constraint<sup>2)</sup> という制約を設けて説明しようとした。しかしながらこの制約は冗長であり Deletion Path の定義が明示的でなく検証可能性の低いものである。Koster 1978 は Locality Principle という Grinder の制約の考え方を発展させた制約を提案しているが, これは一般性が高くまた検証可能性も高いことから, 私たちはこの制約を採用して以上の問題を検討することにしたい。Koster の提案するこの制約は次のようなものである。

⑧ The Locality Principle (Koster 1978:137 or 227)

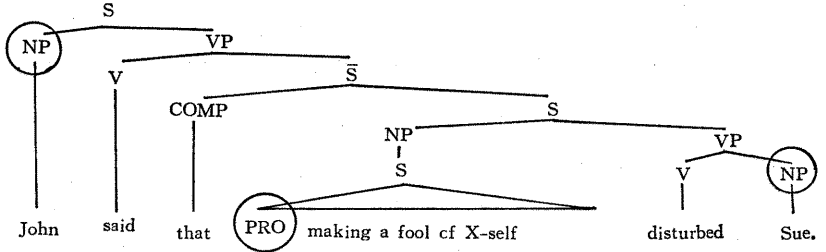
No rule involves  $a_{i+1}$ ,  $\gamma$  (where  $a$  c-commands or is parallel to  $\gamma$ ) in :

...  $a_{i+1}$ , ...,  $a_i$ , ...,  $\gamma$ , ...,  $a_i$ , ...,  $a_{i+1}$ , ... ( $i \geq 1$ )

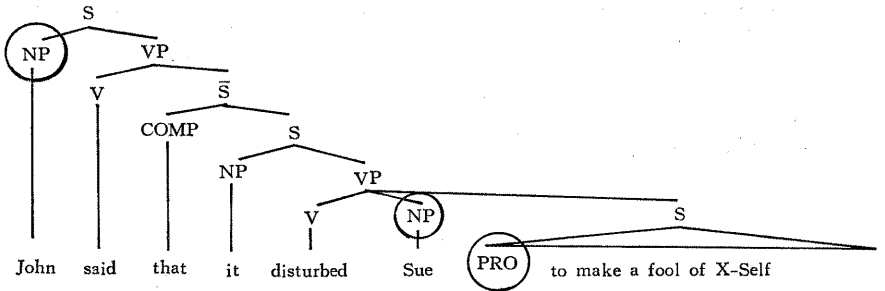
unless : ...

⑤⑥の(b)の場合はそれぞれ the press, the hostess が Locality Principle の  $a_i$  に相当し PRO とコントローラーとの結びつきを阻止するため意味解釈が不可能になるのである。⑦の相違もこの制約で説明できる。

(39) (a)



(b)



(39)(a)の場合は Sue が PRO を c-command していないので  $a_i$  とならず John と PRO の結びつきは阻止しない。(39)(b)は Sue が PRO を c-command しているので John と PRO の結びつきは阻止されるのである。

### 3.2. Locality Principle に従う形容詞述部

Locality Principle と cyclicity の問題を考える前に形容詞の述部の分類上注意すべき点に触れておく。2.1 で述べたように fun, healthful, hard, easy, nice, dangerous, bad などの 'Tough movement predicates' は 'privateness' の高い述部である。PRO 解釈規則によるとこれらの形容詞の主語補文の PRO のコントローラーは、形容詞と GOAL の関係にある NP が義務的に選ばれるはずである。次の例の PRO はそれぞれ John, you の解釈しか不可能である。

(40) (a) PRO hunting elephants can be dangerous for John.

(b) PRO eating vegetables is healthful for you.

しかしここで問題となるのは次のような文である。

(41) John thought that the fact that PRO criticizing himself / herself was hard surprised Mary. (Jacobson & Neubauer 1976)

(41)のイタリック体の部分では himself / herself どちらも可能なことから PRO は任意の NP の解釈が許されることになり今までの議論と矛盾するように見える。しかしもし hard という形容詞の後ろに GOAL にあたる for NP があれば、この NP が必ず PRO の唯一のコントローラーになることは(40)から明らかである。また for NP がない時でも、次の例で Thompson 1973 が指摘しているように PRO と for NP が意味的に異なる解釈は与えられない。(a) の主語補文の PRO と dangerous の表面上省略されている GOAL とは同一の読みが与えられなければならないのである。

(42) (a) Hunting elephants can be dangerous.

(b) (≠a) His hunting elephants can be dangerous for us.

(c) (≠a) Their hunting elephants can be dangerous for you.

この事実は結局 PRO ではなく省略された GOAL の NP の方が任意のコントロール解釈を許す NP であることを物語っている。つまり英語の補文の PRO は必ず GOAL の NP と同一であるが、GOAL の NP は省略されている時は任意の NP の解釈を受けることが可能なのである。

ここでこの NP を便宜上 PRONP という形で表記しいつも任意の解釈が与えられるか観察してみよう。(41)の埋め込み文に受身変形を与えてみよう。

(43) John thought that Mary was surprised by the fact that PRO criticizing \*himself / herself was hard (for PRONP).

himself で非文になるのは PRONP が Mary のみを先行詞としてとることを示している。(41)で両方の NP を先行詞とする PRO 解釈ができるのは PRONP を Mary が c-command していないために、John と PRONP との結びつきが阻止されるからである。一方(43)の場合は Mary が PRONP を c-command していて PRONP に John より近い位置にあるため、Locality Principle によって PRONP=John の読みは阻止されるのである。こうして Tough move-

ment を引き起こす形容詞類の場合は, GOAL の関係にある PRONP が Locality Principle の制約を受け PRO 解釈に直接影響を与えるのである。

### 3.3 Locality Principle の検証

Jacobson & Neubauer 1976 は(44)(45)の例は Intervention Constraint と PRO 解釈をサイクルごとに循環適用することで説明できると考えている。

(44) (a) John thought that shaving himself/herself would bother Mary.

(b) John thought that Mary would be bothered by shaving \*himself/herself.

(45) (a) John thought that shaving himself would disturb Mary.

(b) \* John thought that Mary would be disturbed by shaving himself.

(c) \* John thought that it would disturb Mary to shave himself.

私たちはこれ等は全て Locality Principle で説明可能であり循環適用の概念は不必要であると考える。(44)(b)(45)(b)(c)で John=PRO となれないのは Locality Principle によって Mary がその結びつきを阻止するからである。更に彼らが示している次の例の(b)(c)も Mary が John と PRONP の関係を阻止するために非文となる。

(46) (a) John thought that the fact that criticizing himself was hard disturbed Mary.

(b) \* John thought that Mary was disturbed by the fact that criticizing himself was hard.

(c) \* John thought that it disturbed Mary that criticizing himself was hard.

(47) (a) John thought that the claim that criticizing himself/herself was painful was believed by Mary.

(b) John thought that Mary believed the claim that criticizing \*himself/herself is painful.

(46)(47)両方とも PRONP を Mary が c-command していない(a)の構造では Locality Principle は働かないため John=PRONP の読みは拒否されず、結局 John=PRO となるのである。

更に彼らのあげている次の例を考えてみよう。

- (48) (a) % That the fact that criticizing himself was hard surprised Mary annoyed John.  
 (b) \* That Mary was surprised by the fact that criticizing himself was hard annoyed John.
- (49) (a) That the claim that criticizing % himself / herself was painful was believed by Mary annoyed John.  
 (b) That Mary believed the claim that criticizing \*himself / herself was painful annoyed John.

どちらも(a)より(b)の方が John のコントローラーとなる可能性が低い<sup>3)</sup>のは(b)の場合 Mary が PRONP を確実に c-command していて Locality Principle に抵触するからである。

次に wh-移動の trace の場合であるが、これは PRO のコントローラーとしても機能するし、また Locality Principle の  $\alpha_i$  の項としても機能できると仮定する。次の例は全て John と PRO との結びつきが阻止されている事実を示しているが、これは wh-移動後の trace が  $\alpha_i$  の項として働いているからである。これ等も彼らの例である。

- (50) (a) Which woman did John think *t* would be annoyed by shaving \*himself / herself?  
 (b) Which woman did John think *t* was annoyed at seeing \*himself / herself.  
 (c) Which woman did John think *t* was annoyed that criticizing \*himself / herself was hard.
- (51) (a) \* The woman who John thought *t* would be annoyed by shav-



ing himself.

- (b) \* The woman who John thought *t* was annoyed that criticizing himself was hard.

次の(b)は(a)の構造に Raising, 受身変形という NP movement がかったものであるが, (a)では Jennifer が(b)ではその trace が Elmer と PRO との結びつきを阻止している。

- 52 (a) Elmer claimed Jennifer to have known that it was necessary to brush \*his / her own teeth.  
 (b) Jennifer was claimed by Elmer *t* to have known that it was necessary to brush \*his / her own teeth. (Grinder 1970:307)

### 3.4. Locality Principle と補助規則

Jacobson & Neubauer 1976 は which picture of X-self の句が(a)のように埋め込み文の目的語の位置にあって X=John の読みが与えられない例に対して, (b)のように X=John or Mary の読みが与えられる対照的な例をあげている。

- 53 (a) \* John didn't know that Mary took that picture of himself.  
 (b) (i) John didn't know which picture of himself Mary took *t*.  
 (ii) John didn't know which picture of herself (it's likely that) Mary took *t*.

彼らは Intervention Constraint を PRO-self の解釈に対する制約<sup>4)</sup>として認めるが, そのままでは(a)から派生した(b)(i)も非文のはずである。彼らはこの不備を救うために PRO 解釈と Intervention Constraint は循環的に適用されると主張した。例えば上の例の下の S サイクルで PRO が解釈されないまま wh-移動で COMP の位置へ移動され, 上の S サイクルで RRO 解釈がなされたとすれば Mary は John と PRO の読みを阻止する要素にはならないので (b)(i)は非文にならないことが説明できる。また下の S サイクルで PRO 解釈されれば Mary によって John=PRO は阻止され, PRO=Mary の読みのみ与

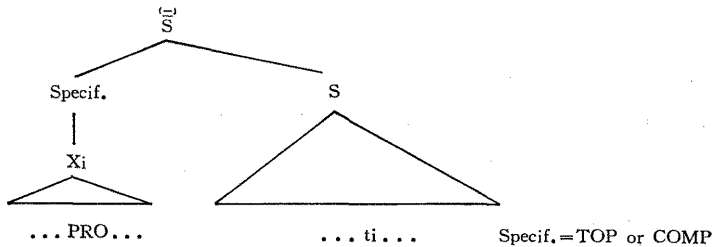
えられ、この *which picture of herself* が *wh-movement* された時(b)(ii)が生成されるのである。同様に Hasegawa 1983:101–102 も次の例をあげて、焦点の位置に抜き出し規則で抜き出された句の PRO の曖昧性を説明するためには、PRO 解釈規則が循環的に適用されなければならないと主張する。

64) It's [ [TOP washing herself / himself in public] [COMP that] George thought that Susan would detest *t* / be bothered by *t* ].

しかし以上の例文の構造を検討してみると曖昧な解釈が許されるのは、どちらも  $\bar{S}$  あるいは  $\bar{S}$  の Specifier の位置、つまり COMP と TOP に生成されたものと考えられる。結局 Locality Principle に次のような補助規則を設定すれば、彼らの「PRO 解釈規則や Intervention Constraint は循環的に適用されなければならない」という主張は不必要なものになると私たちには思われる。

#### 65) 補助規則

もし PRO (self) を含む句が次のような構造の位置にあれば、その句が痕跡 *t* の位置にあるものとして PRO 解釈規則を適用することができる。



この補助規則設定の意義としては次のことがあげられよう。第一に PRO 解釈規則並びにその制約の適用を循環的にする必要がなくなり非常に疑わしく思われた cyclicity の概念を取り除くことができること。第二に次のような関係詞の先行詞の一部である動名詞句の PRO 解釈にも自然な説明を与えられる点である。

- 66) (a) The interest in visiting Las Vegas which Mary displayed *t* ...  
 (b) the addiction to smoking pot that *t* caused John's death ...

(c) the exhaustion from overindulging in sex that *t* eventually ruined his eyesight ... (Stockwell et al. 1968:609)

これらの PRO 決定はいろいろな点で難かしいものと考えられているが、私たちの補助規則によれば容易に解釈が可能である。つまり COMP の位置にある which あるいは that は意味的には PRO を含んだ動名詞と等値なのだから、補助規則(65)によってそれ等が *t* の位置にあるものとして PRO 解釈することができ、(a)(b)(c)にはそれぞれ PRO=Mary, John, he の解釈が自然に与えられる。以上この節では Locality Principle の重要性と補助規則の設定を提案しこれが今までの提案よりすぐれていることを論じた。

\*本稿は昨年10月15日に上智大学で行なわれた東京英語学談話会での同題目の発表に基づいている。また昨年2月19日新潟大学英語英米文学談話会での発表はこれの基礎となっている。有意義なコメントを与えて下さった太田朗、村田勇三郎、秋山怜、向井照彦、千葉修司の諸先生方と立教大学大学院の成田圭市氏に感謝致します。

— 注 —

1) NP 内部の Specifier に支配された NP がコントローラーになる例として次のものがある。

(i) To go to the movies with you would be my pleasure. (I or ARB.)  
(Solan 1978)

(ii) (a) We feel that PRO  $\left\{ \begin{array}{l} \text{learning to cooperate} \\ \text{helping each other} \end{array} \right\}$  is important for their development.

(b) PRO finishing his work on time is important to John's development.

(c) PRO finishing his work on time is important to John's friends.

(Chomsky 1981:77-78)

(c)の場合 PRO=John の解釈があり得ないのは A-over-A の原理が働くものと

考えられる。

2) The Intervention Constraint (Grinder 1970:308)

Equi-NP deletion between two NP, NP<sub>a</sub> and NP<sub>b</sub> is blocked if there exists a possible controller NP<sub>c</sub> in the deletion path.

Deletion Path

An element,  $e_i$  (=NP<sub>c</sub>), is said to be in the deletion path of a deletion transformation,  $T_i$ , involving a controller,  $C_i$  (=NP<sub>a</sub>) and a term to be deleted,  $t_i$  (=NP<sub>b</sub>), if at the time of application of  $T_i$

(a) NP<sub>c</sub> bears more primacy relations with respect to NP<sub>b</sub> than does NP<sub>a</sub> or

(b) NP<sub>a</sub> and NP<sub>c</sub> bear the same primacy relations with respect to NP<sub>b</sub> and NP<sub>c</sub> lies between NP<sub>a</sub> and NP<sub>b</sub> in the linear order specified by precedence and NP<sub>a</sub> and NP<sub>c</sub> are not clause mates.

3) (a)の構造の時彼らの判断では%のものがGrinderの判断では\*であり、これは個人差とかLocality Principle以外の要因に原因があると思う。

(i) That PRO washing himself<sub>i</sub>/\*herself<sub>j</sub> with liquid oxygen disturbed Pete<sub>i</sub> surprised Eileen<sub>j</sub>.

(ii) That it disturbed Pete PRO to wash himself/\*herself surprised Eileen.

(iii) That it was likely that PRO washing himself/\*herself would disturb Pete irritated Eileen.

(Grinder 1970)

4) Cf. Chomsky 1981:212-222

## REFERENCES

Chiba, S. 1971. A note on Equi-NP deletion. L. I. 2. 539-540.

Chomsky, N. 1980. On binding. L. I. 11. 1-46.

\_\_\_\_\_, 1981. Lectures on government and binding. Foris Publications.

Clements, G. N. 1974. Super-equi and the intervention constraint. CLS 5. 13-

- Faraci, R. 1974. Aspects of the grammar of infinitives and *for*-phrases. MIT.
- Grinder J. T. 1970. Super Equi-NP deletion. CLS 6. 297-317.
- , 1971. A reply to super equi-NP deletion as dative deletion. CLS 7. 101-111.
- , 1976. On deletion phenomena in English. Mouton.
- Hasegawa, K. 1983. Bunpo-no-wakugumi. Gekkan Gengo 7. 100-109.
- Jackendoff, R. S. 1972. Semantic interpretation in generative grammar. MIT.
- Jacobson, P. & P. Neubauer 1976. Rule cyclicity : evidence from the intervention constraint. L. I. 7. 429-462.
- Kajita, M. 1976. Henkei-bunpo-riron-no-kiseki. Taishukan.
- Kimball, J. P. 1971. Super equi-NP deletion as dative deletion. CLS 7. 142-148.
- Koster, J. 1978. Locality principles in syntax. Foris Publications.
- Neubauer, P. 1972. Super-equi revisited. CLS 8. 287-293.
- Postal, P. M. 1970. On coreferential subject deletion complement. L. I. 1. 439-500.
- Rosenbaum, P. 1967. The grammar of English predicate complement construction.
- Růžička, Rudolf. 1983. Remarks on control. L. I. 14. 309-324.
- Scheurweghs, G. 1959. Present-day English syntax. London : Longman.
- Solan, L. 1978. On the interpretation of missing complement NPs. Univ. Mass. Occasional papers in linguistics. vol 3. 35-56.
- Stockwell, R. P. et al. 1968. Integration of transformational theories on English syntax. UCLA.
- Thompson, S. A. 1973. On subjectless gerunds in English. F. L. 9. 374-383.
- Wasow, T. & T. Roeper 1972. On the subject of gerunds. F. L. 8. 44-61.